



TITLE:

「登山者の天文學」を紹介す

AUTHOR(S):

水野, 千里

CITATION:

水野, 千里. 「登山者の天文學」を紹介す. 天界 1933, 13(146): 230-233

ISSUE DATE:

1933-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162364>

RIGHT:

「登山者の天文學」を紹介す

水 野 千 里

博士の處女作「星座の親しみ」を読んでチャームされないものはありますまい。これを縁に、天文趣味を喚起した人々は幾十萬に達するでせう。これによつて天界の神祕を知り得た人々は「登山者の天文學」によつて、天文の應用が知られ、益々天文趣味を増し、天文と人生とは如何に密接の關係があるかといふことを悟了せらるゝことゝ存じます。これ私がアマチュア向きの天文書の双璧と叫ぶ所以であります。

本書は第一部 趣味としての天空觀察、第二部 實用の天文知識、第三部 簡単な研究觀測の三大部に分ち、更に之れを九章に細分してあります。

第一部 趣味としての天空觀察

緒言の書き出しは次の様であります。

近來、毎年夏の頃、盛に各地で行はれる登山は、登山それ自身に、大切な種々な目的や、興味があるわけであらうが、尙ほ其の機會に見得る天體の景色に親しむといふ事は、登山者の爲めには大いなる收穫の一つであらうし、更に登山趣味を深める事にもなるであらうと考へる。それで、こゝに専ら登山者の爲めの簡易な天文の手引きを書いてみる。

とて、本書を著された意味を述べられて居ますが、本書を通讀して見ますと、登山者には限られて居ません。肉眼で天文を研究する人、小望遠鏡、又は雙眼鏡所持者又は避暑やキャンプする人が、星の憧れを十分に樂む手引となります。

次に登山者の天文學を、三方面から觀て興味深いものとされて居ます。第一は趣味としての天體觀察、第二は實用の方面、第三は登山の際、山間の清澄な空氣を通じて、夜の天體を研究的に觀察す事であると大別して居られます。而して文章が流暢でありますからそれにも引き付けられて行きます。

第一章 夏の星座

A. 夕暮の空。夏の夕暮の空から説き出してあります。彼の雄大な天の川、その兩岸には有名な織女星と牽牛星、その間に白鳥十字が目を惹きます。

北の星座の主なるもの即ちカシオペヤ、ペルセウス、アンドロメーダ、セフェウス、ペガソスについては神話を説き、アンナ・バヴロフの「白鳥」の踊りの繪を觀ます。

本書には鮮明な挿畫が50圖あつて、本文の補ひをしますと同時に、目を樂しましめ、興味を高めることが大であります。

次に西空の乙女、牧夫、冠、大熊、小熊星座に迄進めてあります。

B. 夜半。『夏の夜半眼を醒まして、テントの中から首を出して、天を仰ぐ時は、夕方眺めた天の景色は既に餘程變つてゐる。『天の河』東西に方向を換へ、頭上にはカシオペヤやアンドロメーダ、ペガソス等が南中して居る』と、讀者をしてアルプスの高地にキャンプして居る感じをさせます。その中に春分點のことで、時刻や方角を知る爲めの實用天文學上、大切な形を指示してゐると特筆してあります。

次に南魚、三角、鯨星座、渦狀星霧、變光星を説いてあります。

C. 早曉の星座。夏の明け方は或る意味に於いて、日の出以上に空の美の憧れが人々を惹き付けるとて、プレヤデス、アルデバラン、カペラ、を賞し、天空全星座中の王者「オリオン」を讃嘆し、双子、シリウス、プロシオンと全天の花やかなところを展開してあります。夏の曉方に之れを眺め、地上の暑さを忘れて各景色を思ひ出すのも一つの星を友とする人々の楽しみであります。

D. 南天の星座。歐米人の避暑地は緯度五十度を遙かに越える場合が多い——スキスの中央でさへ北緯四十七度程度である——だから南の天空の眺めは益々縁が遠くなりますが、我が國では、多くの人々が登山を試みます信州の山々等にしましても、北緯三十六七度の程度に過ぎませんから、南天を探究するのには、登山はまたもない良い機會であります。

私が天の美觀を満喫しました思ひ出は、去る大正十五年七月末、東支那海航行中、早曉に蓬萊丸のデッキから眺めました時。オリオン星座を中心と致しまして、エリダニ河星座の南端 アケルナ1迄を一眸の許に入れたときでありました。時に一天雲なく、水天髣髴として、一つの島も見えず、實に偉觀でありました。日記の一節に未見の地に既知の友(星)多しとは、星に憧るゝものゝ一つのプライドであります。但し此の際にアケルナ1を初めて觀たのであります。歐米人には見られない鳳凰星座を吾々

は観ることが出来るのであります。

本書には大切な圖表が二十一あります。その中第一章の星座に關するものは「星の名」「星座の一部が別名で呼ばれるもの」と「月々の星」の三表であります。

第二章 日月と遊星

A. 月。天一パイに展がる諸星座を背景として、日や月や若干の遊星が、廣い天空を右往左往する有様等、圖や表によつて判り易く記してあります。

B. 水星。C. 金星。D. 火星。E. 木星。F. 土星の五星につきましては、1932—1933年の天空經路を記し、

G. 太陽。十二宮、二十四季節に就いて述べ、朝夕の日出や日没を楽しむか、又は日時計其の他で日影の推移を観察する。

第二部 實用の天文知識

第三章 正しい方角を見る法 A. 太陽に依る方法。B. 北極星に依る方法。二方法に就いて詳述し、半日週弧、日出日没の方位、太陽の卯酉線通過の時角の表、五萬分の一地圖上に於ける尺度、各地の標準時と地方時との差を示す表、日本の標準時の諸表は一般の人々にも大切なものであります。

第四章 時刻を知る方法 A. 太陽に依る方法。B. 恒星に依る方法。太陽又は恒星に依つて時刻を知る方法を述べてありますが、言ふは易くても、實際に行つて見ると、さう簡單には行かない、何度も何度も經驗を積んで上達すべきものであります。本章にも大切な表があります。それは太陽表、日出、日没の時刻(各地の地方時で)恒星時と平均太陽時との表、著名な輝星と其の赤經とが、それであります。

第三部 簡単な研究觀測

第五章 日出と日没の頃 日出と日没との現象は人間生活に最も關係の深い、而かも又最も親しみ深いものであります。登山者や海濱生活の人々が、好んで日の出を観る習慣が廣く行はれて居ります事は、非常に有益、且つ有意義の事ではありますが、更に進んで日出の際に限つて観える天體現象の幾つかを楽しむことによつて天文學に寄與した例があります。

エジプト人は夏の明け方に見えるシリウスの觀測によつて、一年は三百六十五日で

あることを知つて、世界各國に率先して「太陽曆」を採用する動機を作りました。

更に一つ、太陽の出没する際の瞬間(多くは日没)の天然及び地平に向つて興味ある觀測として「綠閃光」の現象があります。

第六章 太陽の黒點 太陽に關して、趣味のある觀測中に黒點の觀測があります。

第七章 流星の觀測 これは肉眼的觀測によるものですから、山に居て澄みきつた天空を眺め觀測することは、よい成績を挙げられます。漫然と天を眺めて居て流星を觀測しますのも一つの方法であります。主な流星群の輻射點の表が本書にありますから其の方を注意して觀て居れば、澤山の流星を記録に留めることが容易であります。

第八章 變光星の觀測 變光星は肉眼丈けでも相當の成績を得ます。本章には一應、その方法が述べてありますから、熟讀して實地に試みられる事を御褒め申します。

第九章 黃道光の觀測 黃道光の觀測は世界の天文學者も等閑に附して居ましたのに、我が東亞天文協會に於ては、觀測部に黃道光課を設け、倉敷天文臺が其の衝に當り觀測の中心となり、全國各地の觀測者の事業を整理して發表し、世界黃道光學界の爲めに貢獻して居る事は大なるものであります。

以上で「登山者の天文學」内容の概要を御紹介致しました。詳しくは同書に依つて研究されたならば、何物かを得られることは信じて疑はないところであります。因に本書は天文に縁ある東京の恒星社の出版で、定價金壹圓六拾錢であります。

急 報 !!

異才故 中村要氏の遺稿 反 射 望 遠 鏡 の 研 究

實費 1.00圓(送料不要)で御願致します。早く申込まれよ。

東亞天文協會事務室

15名を限り追加申込みを受けます。